

市民館の今日的課題を探る

市民館分館の事業体系構造化の視点

社会教育研究会議

熊谷 道広¹ 酒井 成実²（平成12年度） 佐々木 彰³（平成13年度）
島田 秀雄⁴ 木下 あけみ⁵ 中村 康人⁶ 鈴木 良夫⁷（平成13年度）
寺内 藤雄⁸ 池谷 典彦⁹（平成12年度） 西山 和美¹⁰（平成12年度）
小林 雄介¹¹（平成13年度）

要 約

現在，本市の市民館分館（以下「分館」という。）は，日常生活圏における市民の生涯学習に不可欠な拠点として，市内に5ヶ所設置されている。今後新たに4館が整備される予定であり，その役割はますます重要視されていくと考える。そこで，これからの分館の在り方を探ることにした。その結果，分館には，市民が日常生活において，豊かな人間性を高め，自己実現を図ることができるように，身近な教育環境を醸成する努力を期待されていることがわかった。また，あらゆる創意工夫と研鑽を重ねて職務を充実，発展させていくことも緊要な課題である。

キーワード：日常生活圏，地域性，居住地調査，ロングインタビュー，拠点

目 次

主題設定の理由	318	？ 分館の地域性	324
研究の内容	318	？ 分館の管理運営	325
1．研究の仮説	318	？ 分館の施設・設備	325
2．研究の視点	318	？ 分館の事業の構造化	325
3．研究の方法	319	？ 図書館分館等との連携	326
4．研究の考察	319	？ 分館の事業担当職員	327
？ 事業の検証	319	2．今後の課題	327
？ 学習者の居住地調査	321	？ 積み残された課題	327
？ 学習者のロングインタビュー	323	？ 図書館分館の在り方	328
研究のまとめ	324	？ コミュニティルームの比較研究等	328
1．研究の成果	324	参考文献	329
？ 望まれている分館像	324	指導助言者	329
		資料	330

¹教育文化会館大師分館主査，教育文化会館社会教育振興係長（社会教育主事） ²教育文化会館田島分館主査（社会教育主事） ³教育文化会館田島分館主査（社会教育主事） ⁴幸市民館社会教育振興係長（社会教育主事）
⁵橋分館主査 ⁶菅生分館主査（社会教育主事） ⁷岡上分館主査（社会教育主事） ⁸教育文化会館社会教育振興係長，生涯学習推進課振興係長（社会教育主事） ⁹生涯学習推進課主査（社会教育主事） ¹⁰総合教育センター生涯学習研究室主査（社会教育主事） ¹¹総合教育センター生涯学習研究室副主幹（社会教育主事）

主題設定の理由

戦後直後、昭和 21 年、文部次官通牒「公民館の設置運営について」を皮切りに、全国的に「公民館」の設置が進められた。本市においても昭和 26 年の川崎公民館をはじめとして、順次、中原、高津、稲田地区に 4 館が設置された。しかし、その後、経済成長のなかで人口が急速に増加したために、公民館の規模、陣容、機動性等に困難な状況が生じてきた。昭和 38 年の社会教育委員会議答申は従来の公民館活動の限界を指摘し、中学校の通学区域を単位とする「地区分館」の設置を提起した。

昭和 41 年、稲田公民館岡上分室（昭和 53 年改築、岡上文化センター、昭和 62 年名称変更、麻生市民館岡上分館）、昭和 44 年、高津公民館菅生分室（昭和 62 年改築、宮前市民館菅生分館）が開館し、川崎の分館計画の第一歩を踏み出した。

昭和 48 年、社会教育委員会議は「川崎市社会教育施設の基本計画と新しい中間施設(公民館)構想」において、「第二次生活圏」(各行政区)に市民館(中央公民館的なもの)の設置を、地域住民が最も利用しやすい「日常生活圏」(中学校区)に中間施設としての(公民館)の設置を、「近隣住区」には町内会館・自治会館・集会所などの施設と配本所を設置し、これを軸に各教育機関との連携による社会教育の総合的推進構想を建議した。

平成 4 年、図書館分館と併設の教育文化会館田島分館、平成 5 年、高津市民館橋分館、平成 7 年、教育文化会館大師分館が開館し、現在 5 館の分館が設置されている。

さらに平成 11 年度の「2010 プラン新・中期計画」では、新たに日吉、玉川、有馬・野川、生田の 4 館が加わり、既存館とあわせて 9 館の分館が整備される予定である。

今後、平成 15 年度までに 3 館がオープンし、近々 9 館体制となる分館は、既存の 7 市民館を数で上回り、それぞれの地域性に基づいて運営されることとなる。このような状況の現在、日常生活圏における分館の今後の在り方、特に学級・講座等の社会教育事業と市民館事業との相互関係、組み立てについて捉え直しを図ることが早急に求められているといえよう。

研究の内容

1. 研究の仮説

本研究会議は、分館の施設運営や事業実施の現実の姿から、帰納的に分館の今後の在り方、社会教育事業のあるべき関係性、構造を明らかにすることにより、今後、建設される分館の参考にできるのではないかと考え、次のような仮説を設定した。

分館事業を市民館(地区館)事業と対比するとともに、学習者調査を実施して分析・考察することによって、市民の学習ニーズに的確に応える分館の運営に寄与できるであろう。
--

2. 研究の視点

市民館や分館の果たすべき役割は、社会状況に応じて変化してきたといえる。高度経済成長期には、集団就職等によって移り住んだ勤労青年が参加する、成人学校や青年学級が盛んであった。1970 年代からは生活の環境や地域の課題への関心から生じた、市民自治にかかわる様々な学習事業が盛んになったが、今日ではますます重要になっている。近年は、親子が仲間をつくることによって、孤立した子育てからの脱却をめざす子育て支援のための諸施策や、平均寿命の伸張を背景とした高齢者参加事業の隆盛、さらに外国人市民との共生社会の実現をめざした、日本語や異文化等を学びあう識字学級などが特徴としてあげられる。また、平和・人権尊重学級をはじめとする多くの事業に、市民参画と

しての「企画委員会」方式が定着してきている。事業のテーマ・内容・講師等について、市民と職員で構成する企画準備の集まりでニーズを出し合い、調整し、一つの学級にまとめていく方式である。このように市民館・分館が実施する事業は、社会状況や時代の要請、地域性によって柔軟な組み立てが求められてきた。

3．研究の方法

分館の事業を検証するにあたっては地域性の調査が不可欠である。その際、各館の独自の地域性と市民生活課題に共通の地域性について明確にする必要がある。市民館と分館の双方を利用する学習者を対象とした調査が求められよう。また、地域性という外的要因だけでなく、施設や設備の状況、職員体制といった内的要因についても調査する必要がある。

1 年目は地域性の調査のために、次のような研究計画を立てて進めた。

過去の事例から、各分館の特徴的な事業を分析する。

上の事業について、学習者の居住地調査を実施する。

2 年目は市民館と分館の双方を利用する学習者を対象とする、ロングインタビューを各分館で実施した。アンケートによる数量的把握よりも、対象者を絞って一人ひとりに時間をかけてインタビューし、市民館・分館との関係性をやりとりの中で深く探ることとした。その際、分館の施設、設備や職員等の内的要因についても調査項目を用意した。ロングインタビューとは、長い時間をかけて自分史を訊くことによりその人の生活史を明らかにするもので、英国エセックス大学のポール・トンプソン教授の「Oral History」でその手法が確立された社会学上の調査方法である。

4．研究の考察

(1) 事業の検証

分館の体制

分館は、現在、図書館分館との併設館が3館、単独館が2館ある。(別紙分館一覧参照)どちらも主催事業および団体・グループへの会場提供を主な業務としている。延べ床面積は413㎡から1229㎡。単独館の平均が606㎡、併設館が1050㎡。学習室(会議室)や和室、実習室、児童室などを持つ。職員数は併設館で常勤4名(うち1名館長)、非常勤6名(うち図書館担当が常勤1~2、非常勤4~5)、単独館で常勤職員2名、非常勤職員2名(どちらも非常勤職員の業務は貸館管理が中心)と職員数は大きく異なるが、事業担当は常勤・非常勤職員1~2名と、市民館の常勤5名、非常勤 名、計6名と比較すると少ない。

分館の運営の特徴

分館には日常的に職員と来館者、来館者同士が挨拶しあう光景が見られる。窓口で職員と世間話をしていくなど、市民と職員の距離が近いという特徴がある。日常業務は多く、電球交換といった管理的な作業や、夜間の貸館管理業務もある。特に併設館では、市民館業務と図書館カウンター業務の双方を日常的に担当する。土日曜日は半数の体制で対応し、図書館カウンターを2時間交代で2名ずつ配置するのが精一杯である。そのなかで勤労者向けの事業などを企画・実施していくことも求められている。

分館の事業の地域性

それぞれ分館によって地域性は異なる。例えば田島分館の地域は高齢化率が17%であり、川崎市平均11.9%と比較すると高い。ところが、田島分館からわずか1.8kmの大師分館ではマンション建設

ラッシュで、小さい子のいる世帯の増加が著しい。また同様の状況が橘分館にも該当する。これらの状況を踏まえて橘分館ではこれから親になる男女のためのニューカップルセミナーを実施するなど、独自の地域性に応じた事業を展開している。

分館の事業の特徴

分館では、市民の生涯学習を推進する事業の一環として、会議室等の会場提供のほか、乳幼児期から少年期、高齢期に至るまで、幅広く主催事業を実施している。(表1参照。年間事業数9~12本)

平成12年度分館主催事業 (表1)

事業名	内容	大師	田島	橘	菅生	岡上
女性学級	女性問題解決に向けた学習					
市民館保育活動	幼児の親の学習保障のために主催事業に併設					
ニューカップルセミナー	これから親となる男女の子育てへの不安の解消					
乳幼児学級	乳幼児期の理解と親・環境の在り方の学習					
少年仲間づくり	少年に日常では得られない体験の場を提供					
高齢者教室	高齢者の生きがいと仲間づくり					
子育て交流集会	親の交流による家庭、地域の教育機能の活性化					
成人学校	日常生活に必要な科目、学習機会の提供					
保育ボランティア講座	市民館保育活動支援のボランティアの資質向上					
ボランティア講座	地域づくりと社会参加のための学習推進					
地域セミナー	地域学習による問題解決・自治能力の向上					
自主事業	地域に応じた事業の展開					

分館の事業は、地区館である市民館の事業体系のうち、地域の状況を担当職員が判断しながら実施してきたが、市民館事業との位置づけや相互関係について、具体的に検討することがほとんどなく、職員の個別の発想により、その構成や内容が変わることも生じている。あえていえば、前述のように各分館は、独自の地域性を基にして、ニューカップルセミナー、地域セミナー、女性学級、ボランティア講座を実施し、市民生活課題に共通の地域性を基にして、乳幼児学級・高齢者教室、成人学校、自主事業、少年仲間づくりを実施しているといえるだろう。

大師分館の子育て交流集会

分館では前述のような地域性を生かした様々な事業を実施しているが、ここでは事業例として大師分館の子育て交流集会を取り上げる。子育て交流集会は親の交流を図り、地域の教育機能の活性化をめざす事業である。大師分館では平成9年から、「こそだてほっとぱあく」として大師健康ランチ(保健所)と共催で月1回、実施している。事前申込不要で、毎回30~50組の親子が参加する。内容は親子遊び、リフレッシュ体操、グループワークなどで、希望者の育児相談も受け付けている。平成10年からは大師地区の保育園の協力も得、毎回3名の保育士もスタッフとしてかかわっている。大師分館の乳幼児学級の参加者のほとんどが一度は交流集会に参加したことがあるなど、広がりを見せている。また、さらに低年齢(6ヶ月から1歳6ヶ月程度)の子どもと親のための「みにぱあく」も平成10年から月1回、実施している。

申込不要で、気軽に参加できるこの事業が、子育て期の女性にとって貴重な社会参加の第一歩にな

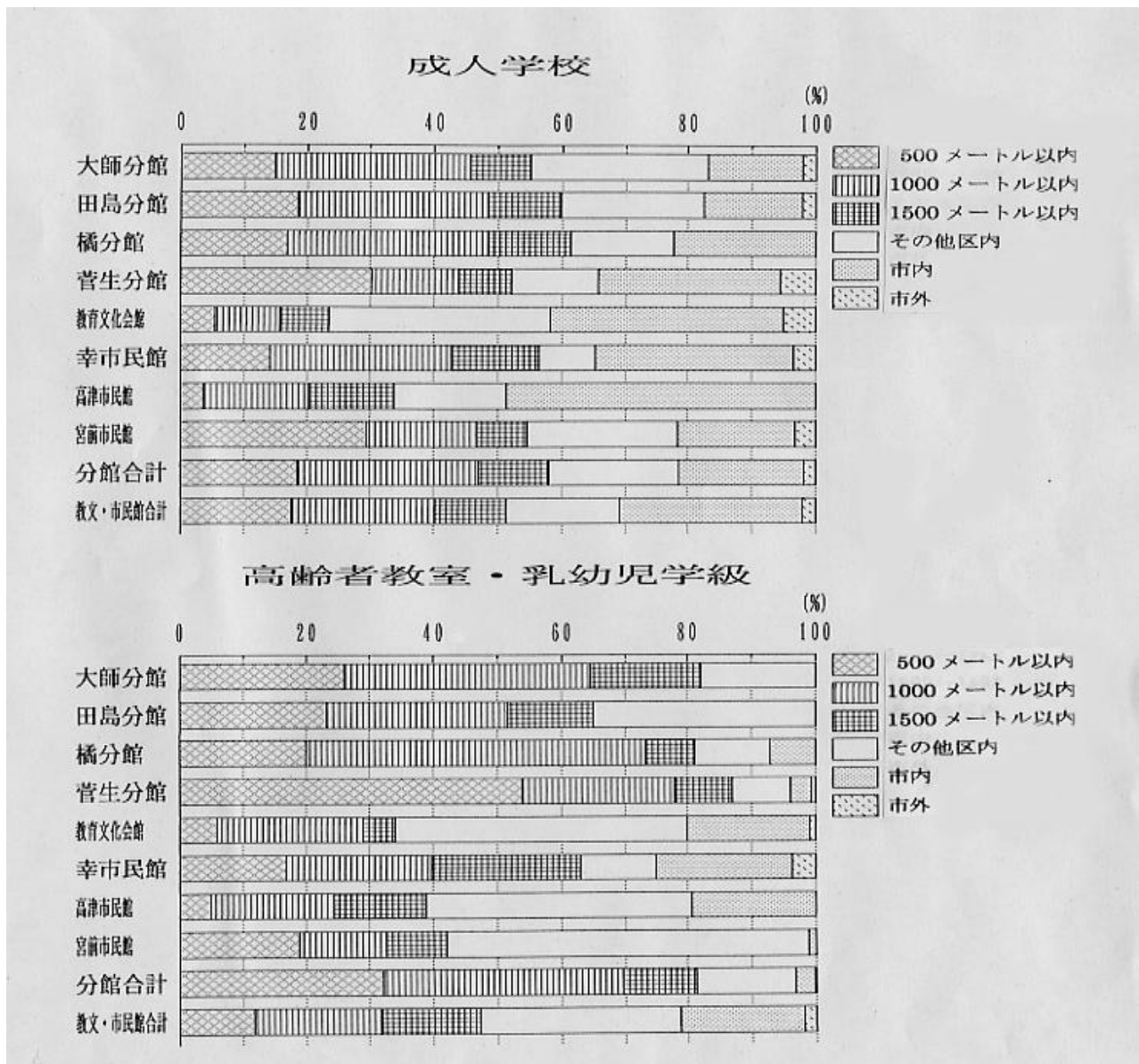
っている。また、地域の関連機関が把握している子育て状況も、カンファレンス（打ち合わせ）で話題になるなど、分館にとっても利点がある。大師地区の地域性を反映した特徴的な事業といえる。

（２）学習者の居住地調査

グラフの作成

分館を利用する学習者の居住地分布を調査することにより地域性の特徴が現れてきた。平成 12 年度までの 3 年間の学習者名簿を基に調査した。中々遠くまで出にくいいため、地域性の影響を受けやすいと考えられる「乳幼児学級」「高齢者教室」（以下「学級」という。）、その対比として比較的広範囲から参加していると思われる「成人学校」について、市民館・分館それぞれの学習者の居住地を、施設からの距離 500m、1000m、1500m 以内、及びそれ以上（その他区内、市内、市外）に分類してグラフ（図 1 参照）を作成した。

分館から居住地までの距離別比率



（図 1）

学級参加者の特徴

この結果を見ると、分館はその多くが半径 1500m 圏内から参加していることがわかる。特に学級においては 1500m 圏内が 81.3%、1000m 以内が 69.7% と、市民館の平均である 47.3% (1500m) 31.9% (1000m) と比較するとほぼ 2 倍の参加である。また、成人学校の参加と比較すると、分館では 1500m 圏内が学級参加 81.3%、成人学校参加が 57.9% と大きく異なる。これは学級の対象者が高齢者や子ども連れで、遠くには通いにくいという要因だけでなく、それぞれの参加動機を比較すると、学級のほうが、友だちを作りたい、社会参加の第一歩としたいなどといったように、より地域に密着している動機も一因であろう。

成人学校参加者の特徴

一方、成人学校の 1500m 圏内の参加は、分館 57.9%、市民館 51.3% と顕著な差は見られない。これは成人学校は市政だより等での市内一斉広報という形態をとっていること、内容が趣味、実技、教養等が中心であり、学級に比べてより個人の関心による参加動機に裏付けられているという要因が反映している。

交通不便な市民館

なお、市民館のうち幸・宮前両市民館は他の市民館と比較して近隣からの参加が多い。これはどちらも交通アクセスがあまりよくない、他館と比較して地域内の勤労者が少ないなどの影響であろう。

地域配置基準

従来より、市民館・図書館の地域配置の基準を 1500m としているが、分館での学級参加者の 7 割が 1000m 以内に居住している実態から見ると、より身近な学習機会の提供が求められているといえよう。

(3) 学習者のロングインタビュー

分館を利用する学習者 13 人 (分館も本館も利用する人) に対してロングインタビューを実施した。

(別添資料質問項目参照)

フェースシート

20 代から 70 代まで、各年代に最低一人の学習者を割り当てた。男性 3 人、女性 10 人が対象である。一般的に市民館・分館の学習者の性別割合と同一条件である。男性 3 人はともに 60 代、退職者である。女性は 40 代 4 人、子育て中である。60 代は男女 5 人で、学習者としては一番多い年齢層である。

分館までの距離は、1500m までが 10 人であり、日常生活圏からの参加として居住地分析と同じ結果が出ている。区域外からの参加は、学習内容、交通の便、立地、自然環境などが理由である。交通機関は徒歩 5 人、自転車 5 人であり、所要時間は 10 分まで 8 人、15 分まで 2 人、20 分以上 3 人で、まさに身近な日常生活圏からの参加が顕著である。

利用実態

分館の利用状況は、月に 2 ~ 3 回 9 人、4 回以上 4 人、1 回 0 人、よく利用する人達という印象が強い。今までの学習歴は、10 年まで 11 人、15 年以上 2 人である。分館の歴史、経緯を知っている人、新ニーズを持っている人、分館と関係性ができている人、活動場所になっている人達である。図書館に本を借りに来て分館を知った人もいる。利用時間帯は、主に午前午後利用で、夜間利用はその半数である。参加の学級講座は、成人学校が一番多く、ボランティア講座、地域セミナー、女性学級の順である。

印象

分館に対する様々な印象については、以下のとおりである。

気軽に入りやすいか？

職員の顔が見える，すぐ事務所がある，対応がアットホームである，下駄履きで行く所，規模が小さい，図書館が一緒なので気軽に入りやすい。

仲間・友達ができやすいか？

近所の人と顔を合わせやすい，お互いに声をかけやすい，顔なじみ，近所づきあいの感覚，買物で出会うことが多いので仲間・友達ができやすい。

学習の拠りどころか？

身近で学習に参加しやすい，企画など自分の意見や感じていることをいいやすい，研究会・サークル・ボランティアの活動拠点になっているので学習の拠りどころである。

生活に役立っているか？

顔と顔を合わせるにより身近な情報交換ができる，なかったらさびしい，保育グループや子育て広場など，生活の一部，年代の幅広い交流ができる，子育ての仲間，先輩ができてとても役立っている，図書館で本が借りられる，何かあった時に集まる場所（拠点）になっているので生活に役立っている。

居場所になっているか？

職員と親しみ，気軽に話すので居場所になっている，職員の対応次第である，近いからクラブ活動の部室のように使える，べったりではいけないと思う，居場所にはなっていないが談話室・他の学習室が借りられるのがありがたい。

精神的な拠りどころになっているか？

同じ講座を受けている人とは気も合いやすく勉強し向上しようとする人が多いので自分も成長できる，仲間になって新しい事にチャレンジできるので精神的な拠りどころになっている，精神的拠り所にはなっていない，それほど頼りにしていない，形式的な対応のため管理者次第ではないか，拠りどころの1つになっている，社会に参加できる方法を具体的に知った。

本館との関係は？

本館でできないことをやっている，限られた地域の市民を対象，分館館長は本館館長と同等な権限と責任がある，本館の小型版である，融通が利く分館は分館として存在している，その存在をアピールしていけばよいのではないか。

図書館分館との関係は？（大師・田島・橘分館のみ）

一緒なので便利である，相異を意識したことはない，機能が異なる，学習の後で関連した本が借りられる図書館の併設はいい，文化の拠点という点で共通している，図書館ももっと外へ向かって地域活動をすべきだ。

いずれの印象からも，日常生活圏における市民の身近な存在としての分館の姿が，特徴的にみえてきている。

研究のまとめ

1．研究の成果

（1）望まれている分館像

事業を検証し，学習者の居住地調査及びロングインタビューを実施した結果，次のことが明らかに

なった。これまでは分館の歴史が比較的浅いこともあり，市民館との対比で分館の在り方について論じることはあったが，分館そのものを地域性も含めて比較検討することはほとんどなかった。今回，分館に焦点をあてて研究を進めるなかで，分館の望まれているあるべき姿がみえてきた。

分館は溜まり場であり，地域活動の場であり，情報発信の場である。社会参加や新しく社会に再出発しようとする人達は，そのような場を求めている。それは子どもも大人も同じである。分館の役割は，それらの人達を支援・サポートすることにあるだろう。身近な施設であるからこそ，場や機会の提供だけでなく，学習相談機能は不可欠な事業になろう。調査の中で繰り返されたとおり，生活圏の中に分館があり，近いから来館する。そして分館は生活に役立っている。「親しみ」「身近さ」「気安さ」「仲間」という言葉のイメージには，分館の役割が確認されているといえる。それは本館に対する意識からでているものと思われるが，同時に本館とは関係のない，分館の本来のあるべき姿を追求する指摘につながる。地域の市民施設の在り方（生涯学習施設）の指摘であり，施設，職員に対する要求でもある。また本館と同じような事業の展開を求める場合もある。分館の理念，事業の在り方のそれぞれに独自の地域性と市民生活課題に共通の地域性の問題が求められるという分館の性格が見えてくるのではないだろうか。

（２）分館の地域性

分館の地域性を見るときに一番重要なのは，それぞれの分館がその場所に設置された背景である。始めに設置場所の選定ありきではない。始めに生かすべき特性をもつ地域ありきである。地元の声を聞き，地域性を生かした拠点づくりでなければならない。そこからそれぞれの分館に独自の地域性が現れてくる。遠くまで出にくい人のために開催される乳幼児学級・高齢者教室事業は，独自の地域性とは別の意味で全ての地域，全ての分館に必要とされている共通の地域性に基づく。また，独自の地域性は，分館の学習者が1000m以内の近隣から来ていること，市民と職員の距離が近いことなどから，それぞれの地域の独自の生活課題や学習課題を生かせるような事業展開が，各分館に期待されていることも示している。

一方，分館の地域性をとおして，地区館である市民館についても分館同様に一定の地域に存在する意義が明らかになった。市民館は区の学習センター的機能を果たすとともに，近隣の市民にとっては分館と同じ身近な学習施設として期待されているのである。

（３）分館の管理・運営

利用者にとって，分館の管理・運営の在り方は，行政サービスの一環として大きな関心事である。正に日常生活圏の学習施設に相応しい在り方を問われているといえる。特に経営者としての館長の役割が重要であるとの指摘がある。職員体制，館内の雰囲気づくりの責任があり，分館の存在をPRする必要がある，中高生が使えるようにできたらよいのだが，ふれあいネットからはずして欲しい，空いている部屋は積極的にアピールしてどんどん利用してもらおう等，分館の経営者として具体的な判断を求められるのが館長である。その館長は分館の運営について市民館運営審議会に諮問することができる。現在，市民館における運営審議会は地区館毎にあり，分館運営は当該地区の運営審議会で諮られている現状がある。分館といえども独立した教育機関である以上，分館の事業について公に審議される必要があると言える。しかし，年に概ね4回という現状の審議回数では到底分館運営に関する内容まで細かく審議できないのではないだろうか。今後は，分館運営に関する審議が各分館毎につくることが望まれる。また，分館の運営審議会の代表は，併せて地区館の運営審議会委員として参画

し、地区に共通する課題を話し合うという連携も必要になるのではないだろうか。その中で地域社会教育計画のすり合わせや地区館・分館の連携や役割が検討されていく機会になるのではないだろうか。

(4) 分館の施設・設備

既存の施設・設備の改修，改善は言っても仕方ない，工夫次第かという利用者の声があった。分館の施設・設備の在り方は，管理・運営の在り方以上に一大関心事である。分館の利用頻度が増せば増すほど，施設・設備に対する要求程度は高くなる。新たな分館づくりの参考となろう。分館が一定の地域ごとに必要であることの意義に基づき，乳幼児をもつ親や，高齢者を主な対象にするならば，フローリング・児童トイレ・防音付きの部屋（学習室兼用）が子育てサークル用の部屋として必要であり，駐車場スペースの確保は必要不可欠になる。大会議室を間仕切りで使用するのではなく，40-50人規模の学習室も独立して2部屋必要である。分館と本館とが距離の隔たりがあり過ぎると，分館の施設・設備に対する規模の要求度は本館と同じになる。料理室・音楽室など特別機能を持つ部屋が複数あればかなりの要求が満たされることになる。細かいことだが，空き部屋の利用に融通が利いたり，印刷機とカッターが自由に使えることは，分館を自らの活動拠点にしているグループにとっては朗報に違いない。

自由に情報交流したり，コミュニケーションを図れる談話室やフリースペースなどの充実は，ますます重要になるであろう。IT関連事業への対応など，施設・設備の根幹にかかわる整備を求める声も見逃せない。

(5) 分館の事業の構造化

分館では，幼い子を持つ親と高齢者に重点をおいて事業を実施することが考えられる。調査の中で明らかになったように高齢者を対象とした学習事業と子育て支援事業について積極的に取り組むことが求められているといえる。高齢者教室も，ボランティアの協力で企画する。いずれの年齢層にとっても，より身近に学習活動拠点が存在することが必須の参加条件である。

子育て支援事業に関しては，学習機会の提供として「ニューカップルセミナー」や「乳幼児学級」「家庭教育学級」等の開設が求められる。その場合，保育体制を整えることが急務となる。

地区館である市民館は，分館建設に合わせて地域社会教育計画を立案するなかで，保育体制にかかわる保育ボランティアの養成を地域住民の参加によって取り組めるよう準備する必要がある。

子育て支援事業のもう一つの柱としては，子連れの親同士が自由に集えるフリースペース的な場の提供と自主的な子育てグループ活動への側面的支援がある。その際，行政からの一方的な支援ではなく，子育てサークルとのパートナーシップによる事業展開が望まれる。また合築の利点を生かし，健康ランチとの連携も視野に入れながら，地域協働の子育て支援ネットワークへと展開が図られることが望まれる。

現代的普遍的課題に向けた学習事業領域としては，とりわけ外国人市民や障害者等にかかわる問題について，市民自らの学習課題としてとらえ，共に生きる地域社会の形成に向けた取組を分館の事業として展開していく必要がある。さらに地域性を生かした事業領域としては，地域セミナー・委託成人学級・自主事業などの市民が企画できる予算を確保すべきである。分館において市民参加システムをつくることは，市民が自ら企画し実行することを奨励することになるからである。いずれにしても，地域の知識や技術を活かした人材活用等，地域の細やかな生活情報の把握は，事業を実施する際のキーワードになるであろう。

(6) 図書館分館等との連携

すでに市民館の主催事業である「乳幼児学級」や「ニューカップルセミナー」等は保健所との連携により実施されている。連携の内容としては、広報依頼、講師依頼が中心である。健康ランチと分館との合築は、職員間の情報交換を高めることにより、それぞれの機能を補完しあうことが可能となる。これまで以上に地域の子育て支援に対する連携が深められるのではないだろうか。

出張所との合築では、玄関ホールに隣接する市民ギャラリーの運営や市民情報コーナーの活用、区政推進事業と分館事業の内容、施設の共同運営管理において十分な情報交換と連携が必要となる。さらに施設運営や事業実施に関して、なんらかの市民参加システムをつくり、それぞれの施設職員と地域住民が定期的に話し合う場を持つことにより、地域住民のニーズや問題意識の共有が相互に図られることになろう。

図書館の登録者やサークル祭参加者の中心層は、館から半径 500 メートルの範囲に生活の拠点を持っている。一般的に市民館機能はどちらかという特定の団体・グループへの貸し館事業や、特定の学習者への学習機会提供事業に重点が置かれている。それに対し図書館機能は、個人で自由に立ち寄れるフリースペース的な性格を持つため、自然と開放的な雰囲気を出し出す効果がある。分館と図書館分館をつなぐロビーをブラウジングコーナーとして設置する工夫をし、また職務分担という点で見た場合、分館職員全員が窓口・相談業務、図書館業務、市民館事業にかかわりを持ち、地域住民と近い人間関係をつくることができるという点から言えば、まさに分館にこそ本来の公民館機能が備わっているといえるのではないだろうか。設備から見た場合、児童室の設置場所に関しても、図書館分館と市民館分館との間に設けることにより、従来の保育場所としての機能のほか、図書館の読み聞かせ等にも利用でき、柔軟な活用が可能な備えとなっている。規模の小さい分館ならではの機動力が期待される。また図書館分館に設置される「郷土資料コーナー」は、住民の地域史に関する学習活動の支援を市民館と図書館相互の機能を生かしながら充実させていくことが望まれる。

(7) 分館の事業担当職員

利用者はいつでもほっとできる様な分館にしてほしいと願っている。学習・活動について、興味・関心を持つ職員、柔軟な事業担当者、得意分野を活かす職員、皆の意欲を引き出せるような職員の配置が必要である。企画が命である。職員の量と質の充実を求められている。職員は、地域の人材を育てていく役割も期待されている。分館の担当職員は、事業経験がある者について、短期異動の対象からはずすことも考えられる。事業担当の職員が住民の身近な場の中にいるという意味は大きい。事業も常に住民と作り上げていくことが可能だからである。調査結果にもあったように必要なのは、住民の顔のみえる空間的・関係的な距離である。社会教育関係（市民館）のベテラン職員を短期間で他の職場に異動させることは見直しの時期にあるかもしれない。地域に（自分の学んだ事を）還元できる人が育つまで見守り、川崎をよくする人が育っていく、趣味だけでなく、町のなかの活性化に底力を持ち、良識のある時代意識をもった市民が育っていく、自分の満足だけでなく、皆で勉強しながら地域の中で何かの役割を担っていける人、一步を踏み出せる人が育っていくことに、学習や文化の事業をとおして市民と協働で安定、持続して取り組むことは、市民館・分館の職員の仕事である。

2. 今後の課題

(1) 積み残された当面の課題

事業企画・運営への市民参加

市民グループ、ボランティア、企画委員など、地域の人達が自らの手で、自らの活動を展開し、支えていく方式（各事業の企画・運営・実施を、市民の方に担ってもらう方式）をさらに推し進める。それには、市民同士、市民と職員のオープンな話し合いの場と、市民館の持つ情報の公開、適切な助言やコーディネートのできる専門性の高い職員の配置が不可欠である。また、市民グループ同士の連携や、組織化も大切である。

保育付き事業の拡充

地域性を考えると、子育て期の親を支援し、活動の場を広げてもらうためにも、保育付きの事業がもっとほしい（たとえばすべての成人学校につけるなど）。土・日に対応できるボランティアの確保も含め、保育ボランティアの充実が課題である。親子で一緒に過ごす時間の充実を図る事業も需要は高い。

顔見知りの人と会わないようにするグループ

身近な日常生活圏とはいえ、顔見知りの人と会わないようにするグループ（本当のことが地元では言いにくいことがあるし先進的な意見は地元では受け入れがたいと感じ本館の全区から集まる学級に参加する層）、地域での仲間を作る地域で学ぶグループがいるように感じる。企画の立て方もそれを意識してもよいであろう。

事業担当職員及び事業の充実

大師分館と橘分館では現在、常勤1名、非常勤1名が主に事業を担当している。非常勤1名は、社会教育指導員経験者であるが、地区館（本館）のように制度化されていない。地域に詳しく、かつ事業経験のある指導員は、人数が少なく即戦力が要求される分館にとっては、大変心強い。また、常勤の事業担当が異動したときも、事業のある程度の継続化が図れる。（他に事業担当がいない場合、異動時の引継ぎにも限界があり、分館事業が一時停滞したり、継続性がなくなったりすることもある。）もちろん、地区館とは職務内容は多少違い、図書館業務、受付業務全般にかかわることは常勤職員と同じで当然のことであるが、指導員配置を分館でも制度化したい。また、担当を固定せず、職員の資質に配慮した分担も、事業活性化には有効であり、過去に何度か試みられている。ただ、館全体の仕事の内容・量・かたより・優先度・ローテーションなどを見通し把握・調整する人と、職員同士の頻繁な話し合いの場が必要であり、人が少ない現場ではなかなか難しいのも事実である。その意味でも事業を担当する職員の複数配置は必須条件と思われる。

さらに分館で実施している事業を詳細に検討し、市民の学習ニーズに応える事業の可能性を探りたい。柔軟に対応する事業のために、予算の組替も必要になろう。このことは現在取り組まれていない市民への学習サービスを洗い出すことにもつながるであろう。

これら分館の事業の在り方、市民の学習ニーズ、関連機関との連携の可能性を複層的に検討していくなかで、市民と共に歩む分館の姿をいっそう明確なものとしていきたい。

図書館部門との連携

図書館と併設である分館は、そのメリットをもっと活かしたい。実際に図書館利用者が、来館の折に市民館事業のチラシに足を止めたり、学習室の存在を知って借りるというケースは多いし、月1回の図書館整理日は館内がガラんとし、火の消えたようである。平屋の独立館で、外からの出入りがしやすく、図書館が親子連れでにぎわっている状況があれば、市民館部門にとってはありがたい。逆に、学習室利用の帰りがけに図書館を利用する方も多い。市民館・図書館利用者がどの程度重なっているのか、具体的な調査はしていないが、相乗効果は大である。事業と連動した図書館内のポスター展示、

事業関連図書の特設コーナー，読み聞かせボランティア講座等を，実施している館もある。橘分館での読み聞かせ講座は定員の3倍強の応募があり，今後の拡充が望まれる。

他の行政機関との連携

大師分館の子育て交流集会は保健所（ランチ）との共催，橘分館の「1歳児の親子遊び」は，近隣保育園，保健所との共催であるが，内容はバラエティーに富み，大変好評で，口コミで希望者が広がっている。他にも，近隣の行政機関が協力すれば，必要とされる事業が展開できるのではないか。これら関連機関との連携による事業のふくらみと深まりの実態とその可能性の分析も今後の課題である。もちろんこの中に地域の教育機関の中核である学校との連携も視野に入れていくべき課題であろう。

（2）図書館分館の在り方

今回の研究には図書館職員が参加していない。図書館と公民館で一つの分館なのである。その意味で，分館に関する十分な研究活動にならなかった。ある分館ではハード面であるが，図書館部門の静寂さを確保できない構造が問題になっている。図書館入口が広く開放的で，1階ロビー，2階への階段，2階ロビーと直結している。市民館利用者の1階ロビーでの会話や，階段の上り下り，子どもの騒ぐ声がまともに図書館に響く構造である。騒がしくなると，そのたびに職員が声かけをするが，トラブルになる事も時々ある。併設館特有の問題やソフト面の課題も含めて市民館職員と図書館職員の共同の分館研究が望まれる。

（3）コミュニティルームの比較研究等

市民館・分館事業の比較研究はもとより，コミュニティルームとの比較研究がある。今回の研究の1年目には比較対象に挙がっていたが，時間不足で実現できなかった。地域のなかで成人の学習という要素がどのようなダイナミクスを生み出すのか，虹ヶ丘コミュニティルームの活動の分析に取り組む機会を是非作り出したい。また，今回の二つの調査はいずれも来館者調査であった。未来館者の調査，潜在的ニーズ把握の必要性は認識しながらも，手が回らなかったのが実情である。研究計画の不備を反省し，今後の研究を深める課題として銘記しなければならない。

この研究を通じて，なぜ社会教育施設が必要なのか，なぜ公教育施設が成立するか，改めて学ぶことができたことを感謝したい。社会教育法第3条に教育環境を醸成する努力は国，自治体の任務であると定められている。分館は日常生活圏で，直接に民主的自治能力のある自主的で主体的な市民に対して，直面する様々な生活課題を解決するための方策を提供し，活動を支援することを期待されているのだと思う。地域現場から，「生活のありようの一つ一つに改変の途を提言していくこと」こそが分館の使命なのだと確信した。

最後に本研究を進めるにあたり，適切なご指導ご助言をいただきました奥田泰弘先生，また，資料を提供していただいた市民館・分館の職員の皆様，インタビューにご協力いただいた市民の皆様から感謝申し上げます。

【参考文献】

日本社会教育学会編『現代公民館の創造』公民館50年の歩みと展望 東洋館出版社 1999年

川崎市社会教育五十年史編集検討委員会編『川崎市社会教育五十年史』 川崎市教育委員会 1998年
川崎市『川崎新時代 2010 プラン』 1999年
川崎市生涯学習推進基本計画策定調査委員会『川崎市生涯学習推進基本計画』 1993年
教育文化会館・市民館体制見直し検討会議『教育文化会館・市民館体制見直し検討会議報告書』
1999年
川崎市総合教育センター『川崎市社会教育情報第6号』 1992年
ぶんかん - 宮前市民館菅生分館のあゆみ 菅生分室を盛り上げる会 1988年

【指導助言者】

中央大学文学部教授（川崎市総合教育センター専門員）

奥田 泰弘

市民館分館の活動に関するロングインタビュー質問項目

実施館：

実施日：

担当者：

[フェースシート]

年代

性別

自宅から分館・本館までの距離

分館・本館までの交通手段（徒歩、自転車、車他）

自宅から分館・本館までの時間

[利用実態]

分館・本館の利用回数 / 月

分館・本館の利用年数

分館・本館の利用時間帯（午前、午後、夜間）

分館・本館の学習歴・利用歴（利用のきっかけから現在まで）

[印象]

分館は本館と比べて気軽に入りやすいといわれますがいかがですか。その事例は何ですか。

分館は本館と比べて仲間・友達ができやすいといわれますがいかがですか。その事例は何ですか。

分館はあなたの学習の拠りどころになっていると思いますか。その事例は何ですか。本館と比べてどうですか。

分館はあなたの生活に役立っていると思いますか。その事例は何ですか。本館と比べてどうですか。

分館はあなたの居場所（ゆったりできる、安らげる、出入り自由）になっていると思いますか。その事例は何ですか。本館と比べてどうですか。

分館はあなたの精神的な拠りどころになっていると思いますか。その事例は何ですか。本館と比べてどうですか。

分館と本館の関係について、あなたのイメージに近いものはどれですか。

（複数回答可）

- ・ 分館は本館の小型版である。
- ・ 分館は本館でできないことをやっている。

- ・ 分館は本館とは関係のない独立館である。
- ・ 分館長は本館館長と同等な権限と責任がある。
- ・ 分館は本館の指示で仕事をしている。
- ・ 分館は本館の仕事の一部を担っている。
- ・ 分館は限られた地域の市民を対象にし、本館は一般市民を対象にしている。
- ・ 分館は融通が利くが本館は厳格である。
- ・ 事業や予算は分館よりも本館を優先している。

大師・田島・橘分館には、図書館がありますが、あなたのイメージに近いものはどれですか。(複数回答可、上記同一対象者に大師・田島・橘分館のみ実施する)

- ・ 市民館分館と図書館分館は一緒なので便利である。
- ・ 市民館分館と図書館分館とは機能が異なる。
- ・ 市民館分館と図書館分館の相異を意識したことはない。
- ・ 図書館分館利用者はあまり市民館分館を利用しない。
- ・ 市民館分館利用者はあまり図書館分館を利用しない。
- ・ 図書館分館に来て市民館分館を知った。

[期待すること]

本館よりも分館に特に望むことは何ですか。

施設・設備について

管理・運営について

事業について

職員について

その他

本館に望むことは何ですか。

施設・設備について





管理・運営について

事業について

職員について

その他

分 館 一 覧

名称	図書 館 併設	延床面積 (㎡)	開館 年 月	主 要 部 分	利用団体 数	事 業 参加者数	施 設 風 景
教育 文化 会館 大師 分館		1032	平成 7年 11月	学習室2 実習室 和室 談話室 児童室 図書館	2347	3180	
教育 文化 会館 田島 分館		890	平成 4年 10月	学習室2 実習室 和室 談話室 児 童室 図書館	2316	2601	
高津 市民 館 橘 分館		1229	平成 5年 10月	学習室4 和室 実習室 談話室 児童室 談話・ギャ ラリーコーナー 図書館	2872	1668	
宮前 市民 館 菅生 分館	×	413	昭和 62年 4月	集会室 学習室 和室 談話室 児童室	1631	2578	
麻生 市民 館 岡上 分館	×	800	昭和 53年 5月	茶菓道室 集会室 談話室 図書室 体育室 学習室 児童室	1273	338	